

(4) 注目すべき生物種

34 - 01 検討状況報告書には、植物ではモンゴリナラとスズカカンアオイ、動物では繁殖鳥類とオオタカ、ギフチョウしか扱われておらず、注目すべき植物種 15 種、注目すべき動物種 22 種、植物種の分布から見た注目すべきエリアや植物群落などについては、まったく触れられていない。

《 見 解 》

注目すべき植物種 15 種、注目すべき動物種 22 種、植物種の分布情報を全て重合した図面と会場計画図を重合することで、保全上の課題の抽出を行っております。

34 - 02 環境万博と言いながら自然が破壊される。

注目すべき 37 種類の生物の存在するところだけがそのままであれば絶滅危惧種が生き残れるのか。十分な調査もされず、どんな影響を与えるかは何も書かれていない。協会が真に保護することを考えているなら、ささ池のハッチョウトンボ、かえで池のシラタマホシクサ、サギソウなどを移植してほしい。自然豊かな青少年公園で万博が開催されることに反対だし、移植が正しいことではないが、注目すべき 37 種類を守るためにやむを得ない。全部を移植するように。

34 - 03 ウンヌケについて、ススキと比較して観察できる見やすい場所があります。保存できればよいと思います。（意見書には具体的な位置情報も示されておりますが、希少種保護の観点から本書には記載しないこととします。）

《 見 解 》

土地の改変や施設の整備に伴う注目すべき生物種への影響の回避・低減に努めるとともに、会場計画の具体化に当たっては、愛知青少年公園の将来計画と連動した会場計画ともなるよう関係機関と協議した上で、施設の規模・構造、管理・運営計画等に適切に反映できるよう努めてまいります。

34 - 04 登録会場のフェンスであるが、これが設置されると野生動物の移動の妨げになるとの専門家の指摘がある。その対策を示されたい。（他に同趣旨 1 件）

《 見 解 》

計画の具体化に応じて環境影響を把握し、環境保全措置の検討に適切に反映できるよう努めてまいります。

34 - 05 1995 年まで海上南地区でオオタカが営巣していた実績があり、再び同地区で営巣する可能性が否定できない。オオタカ調査検討会でもその可能性が指摘されており、そうなれば関連して海上西地区も重要なエサ捕り場となる。

34 - 06 生態系、中でも猛禽類の調査・保護には十分な情勢分析を行うこと。海上の森のオオタカ営巣確認に伴う要望書の骨子は、愛知県で保護すること、繁殖行動について今後 2 年間以上調査すること、調査は専門家のアドバイスを受けながら公正に行うこと。

34 - 07 青少年公園内と周辺で「飛翔が確認されており、ハンティング・止まり行動なども見られた」ことから、この地域のほぼ全域がオオタカの行動圏であることは明らかです。保護のためには万

博の会場としての使用は極力避けるべきです。繁殖、生育環境に影響を与えないための具体的対応が示されるべきです。

《 見 解 》

オオタカ調査検討会では、海上地区及びその周辺におけるこれまでの調査結果から、現段階での会場計画は営巣中心域からかなり離れているので、営巣に大きな影響を与えることはないものとされており、今後、工事に伴うモニタリング調査方法のあり方や、オオタカの餌場の調査方法のあり方を中心に引き続き検討していくこととされておりますので、検討状況に応じて適切に対応してまいります。

34 - 08 昆虫リストの中に、モートンイトトンボ（湿地性指標種）、ヒメヒカゲ（改正 RDB 絶滅危惧 類）、ツマグロキチョウ（RDB 絶滅危惧 類）が載っているが、何のコメントもない。もっともヒメヒカゲとツマグロキチョウは誤同定ではないか。もしいるなら、ギフチョウなどと比べものにならないほど重要である。誤同定とするなら、調査自身を否定されるほどのレベルの低さが問題となろう。

《 見 解 》

モートンイトトンボは、愛知青少年公園内での現地調査結果では確認されておらず、周辺部で実施された既存の調査でも確認されておりませんので、青少年公園地区のファウナリストには記載しておりません。

ヒメヒカゲは、ご指摘のとおり調査時の記載ミスで、ヒメジャノメの間違いでしたので訂正いたします。

ツマグロキチョウは、愛知青少年公園内での現地調査結果では確認されておりませんが、周辺部で実施された既存の調査で確認されております。

34 - 09 オオイトトンボ、セスジイトトンボ、ミヤマアカネ、ヤマキマダラヒカゲなど分布上可能性がない種が出てきたり、当然でてくるべきヒメアカネ、ハネビロエゾトンボ、コムラサキ（クロコムラサキも含む）などが無い。これらのトンボやチョウ類の誤同定が多く見られることは、他の分類群でも疑わざるを得ない。標本の提示、調査者及び同定者の名前を明らかにすることにより調査データの信憑性が明らかにされるであろう。

《 見 解 》

オオイトトンボ、セスジイトトンボ、ミヤマアカネについては「愛知県の動物」の愛知県産トンボ分布一覧にも記載されており、主に平地や丘陵地に広く分布している種とされております。

ヤマキマダラヒカゲは、ご指摘のとおり調査時の記載ミスで、サトキマダラヒカゲの間違いでしたので訂正いたします。

ヒメアカネは、今年度に関連事業の調査で確認されたという報告があり、評価書の修正に反映させてまいります。

ハネビロエゾトンボ、コムラサキについては、愛知青少年公園内での現地調査結果では確認されておりません。

34 - 10 ギフチョウの調査において、「本調査期間中には幼虫は確認されなかった。」とされているが、方法書、準備書の段階を省略した欠陥アセスのために、調査時期及び方法の検討がなされていないために確認できなかったのである。間に合わせの調査であったために、今年の発生時期が遅れていることを考慮に入れることができなかったのである。調査日の設定の甘さと変更をしなかった判断がこのような結果を生み出した。

ギフチョウについては、回避・低減をとばした保全策ではなく保護策の検討をおこなうべきである。

34 - 11 p.87、ギフチョウについて、「卵が多く確認された」にもかかわらず、「本調査期間中には幼虫は確認されなかった」の結論は何を言わんやである。大慌ての調査だったことを白状しているだけである。「愛知青少年公園及びその周辺における環境調査結果について」p.99で見ると、幼虫の調査は、成虫を見つけてから2週間あとで、しかもたった3日間の不十分な調査だということが判明する。

34 - 12 p.87～88で、南側にギフチョウが広く分布していることが記載されています。しかし、北地区でも成虫が確認されていてカンアオイも分布していることから、北地区もギフチョウのエリアである可能性があります。卵を多く確認しながら「幼虫は確認されなかった」というのは調査日数が数日しかなく不十分であったことを示しています。不十分な調査結果で南地区だけを「ギフチョウの確認頻度の高いエリア」とすることは、ここだけ保全すれば良いという誤った判断をすることになります。更に調査をすべきです。

《 見 解 》

ギフチョウの生息状況調査は、専門家のアドバイスを受け、成虫の発生状況から調査日を設定し、調査地域内での繁殖状況を把握する上で最も重要な卵のカウントを行うことを目的として実施いたしました。

また、現時点では具体的な環境保全措置の検討を行うことができる段階にはありませんが、引き続き会場計画の熟度に応じて有効な保全措置の検討を行い、会場計画及び追跡調査計画の検討に適切に反映できるよう努めてまいります。

34 - 13 ハッチョウトンボやベニイトンボなど会場予定地内の注目すべき種に対する評価や回避・低減などの保全策が書かれていない。貴重種の確認を含めて影響・評価予測などの調査をきちんとやっておかないと問題となる。

34 - 14 ハッチョウトンボなどについても、南地区に多く生息しているから南地区を保全すれば保護できると考えるのは誤りです。北地区の存在も含めて大きな生態系として存在しているのですから総合的な保全対策をすべきです。

《 見 解 》

現時点では具体的な環境保全措置の検討を行うことができる段階にはありませんが、引き続き会場計画の熟度に応じて有効な保全措置の検討を行い、会場計画及び追跡調査計画の検討に適切に反映できるよう努めてまいります。

34 - 15 「愛知青少年公園及びその周辺における環境調査結果について」では、水生昆虫調査が書かれているが、何の評価もなしに「流路への水域直接改変や集水域の変更を伴うような周辺地形の改変はおこなわない。」とされ、この地域特有の砂れき層や少ない水量の川への影響は、人の入り込みや工事などの影響としてきちんと調査すべきである。水生昆虫の同定は、イトトンボ類やアカネ属は幼虫での同定は難しく、トビケラ類などを含めて成虫での確認が必要になる。このことは調査データだけでなく、調査そのものの信憑性をも関係する。

《 見 解 》

イトトンボ類やアカネ属の中でもオオイトトンボ、ミヤマアカネは幼虫で同定しました。また、トビケラ類に関しては一般的である幼虫での同定を行っておりますが、他のトンボ類やチョウ類の大半は成虫での確認をしております。

なお、現時点では具体的な環境保全措置の検討を行うことができる段階にはありませんが、引き続き会場計画の熟度に応じて有効な保全措置の検討を行い、会場計画及び追跡調査計画の検討に適切に反映できるよう努めてまいります。